

## 第75回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

令和3年4月15日 日本建築学会近畿支部

### 《短大・高専・専修学校の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	織物語	佐々木蒼生	中央工学校OSAKA 住宅デザイン科	24
2	<a href="#">えりと共に暮す『日常』 ～原風景としての琵琶湖の再生～</a>	高木 奨也	京都建築大学校 建築学科	5
3	1 kmの逃避行 ～日常を忘れ漂う、非日常の美術館～	福永 尚紀	京都建築専門学校 建築科二部	18
4	弓道場 ー知るきっかけとなる場所ー	島田 実莉	修成建設専門学校 建築学科	4
5	ほたるび	久田 礼花	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	9
6	新しい場所 ～商店街における持続可能な構成の再構築～	井上 愛実	大手前短期大学 ライフデザイン総合学科	6
7	光の灯る集落 自然豊かな仕事場の提案	杉本 充	修成建設専門学校 建築学科	12
8	赤煉瓦の記憶	大上 智子	大阪工業技術専門学校 建築学科	9
9	<a href="#">馬×小学校～ホースセラピーによる子どもと 引退馬のための新しい居処～</a>	廣田明日香	京都建築大学校 建築専攻科	5
10	住みつづけられる街・八町目ハウス	松田 正子	京都建築専門学校 建築科二部	10
11	みんなの園庭-鳴尾旧枝川空き地の再生による共同利用の園庭-	六車 駿介	国立明石工業高等専門学校 建築学科	7
12	127 泓の Unnatural	大西 未桜	修成建設専門学校 空間デザイン学科	14
13	<a href="#">めぐり・であいの廃線路</a>	石井大治朗	国立明石工業高等専門学校 建築学科	9

(受付順) 以上13点<No. 欄に○印のものは入選作品>

### 《工業高校建築科の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	道の駅 山陽	山本ゆきな	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
2	旅館	森田 樺	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	7
3	ONE HOUSING COMMUNITY	緒方ひらり	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6
4	中学校	倉本 紗希	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	5
5	<a href="#">ファーマーズ・ハウス ーやすらぎを与える農家住宅ー</a>	吉田 くみ	大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科	2

(受付順) 以上5点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
令和2年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第75回）審査報告

審査員長 亀谷 義浩

令和3年4月15日（木） 審査会場：オンライン（Zoom）を利用

審査員長（互選） 亀谷義浩  
審査員（50音順） 栗山尚子・高木真人・中西ひろむ・西野佐弥香・西野雄一郎・安福健祐  
応募作品 短大・高専・専修学校の部13点、工業高校の部5点（別紙参照）

### 審査経過と審査講評

本年度の審査は、応募いただいたPDFデータを各審査員に事前配布し、各審査員が審査会までに確認した上、審査会当日にビデオ会議システムを利用したオンラインでの審査会を行った。審査会当日は審査員7名のうち5名が出席し、2名が欠席であった。欠席の審査員からは事前に審査結果を事務局に提出いただいている。審査に先立ち、コンクールの目的、対象、提出、審査などの内規を確認した後、審査員互選により審査委員長を選出した。

本年度の応募作品は、「短大・高専・専修学校の部」13作品（昨年度14作品）、「工業高校の部」5作品（昨年度3作品）であったため、入選作品として、「短大・高専・専修学校の部」は3作品、「工業高校の部」は1作品を選ぶこととした。審査では、まず、各審査員が優れていると評価する作品を「短大・高専・専修学校の部」から3作品、「工業高校の部」から1作品を選んで投票し、その結果を踏まえて、審査員全員でPDFデータを確認しながら審議を行い、入選作品を選出した。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では、No.4が4票、No.12が5票と比較的多くの票を集めたが、満票の作品はなく、その他、票のあった作品は、No.11が3票、No.3、8、9、13が2票、No.1が1票であった。これら8作品を入選候補としてひとつひとつの作品を議論した。No.2は、琵琶湖の生態系や伝統漁法、さらには湖上の暮らしを提案したものであり入選作品にふさわしいと判断したが、社会問題を取り上げたNo.9とNo.11で意見が分かるとともに、地域問題を取り上げたNo.11とNo.13でも意見が分かれる結果となった。これら4作品においては、さらなる議論を行い投票した結果、馬と子供の触れ合いを提案したNo.9及び鉄道廃線を利用した可動建築を提案したNo.13が選ばれた。No.11については、広い園庭を持つ保育園の提案であるが、プログラムに甘さがあるという意見や凶面表現を問題視する意見があり、No.13については、離島問題を題材に学校や美術館などの提案であり、非常にプレゼンテーションが優れているという評価ではあったが、離島問題を解決できる提案であるかが疑問に残るとともに、建築物の造形性とプログラムに疑問が残った。選外ではあるが、No.1の京都与謝野町における丹後ちりめんをテーマにした地域産業や地域文化の再認識施設は重要な課題であると考えられる。また、No.8は、近代建築物の保存に対する大胆な提案であった。

「工業高校の部」では、No.1、3、5がそれぞれ3票を得るという結果となった。これら3作品について、「短大・高専・専修学校の部」と同様に、ひとつひとつの作品を議論した。その結果、畑とともに暮らす生活を提案したNo.5が入選にふさわしいという結論を得た。この

作品は、現在の日本におけるライフスタイルの変化に可能性を見いだしたものであり、図面も表現方法も非常によくできている作品であった。選外となったが、No.1は、道の駅の設計であり、プランや図面表現はよくできていた。No.3は、集合住宅を4棟設計した力作であった。

個々の入選作品については、入選作品選評に譲るが、全体としてみれば、現在の日本の社会における非常に重要な課題を設定している作品が多く見られ、地域社会の問題や伝統、生活、また、命や心の問題まで踏み込んだ提案も見受けられる。表現方法も手描きのものから3Dモデリングをしたものまで様々であった。さらには、多くの作品で、緻密なサーベイ、リサーチに基づき提案がなされていることは高く評価できる。

(亀谷)

### えりと共に暮す『日常』～原風景としての琵琶湖の再生～

高木 奨也君 (京都建築大学校)

工業地帯やゴルフ場として時々都合良く利用されてきた琵琶湖の埋立地を自然環境の再生拠点へと転換する提案である。本計画では、埋め立てられた土を撤去して湖に戻し、その湖上に自然の浄化作用が期待できるヨシ原、伝統漁法であるえり漁場、伝統産業である水上田んぼ・権座や淡水真珠養殖場、自然エネルギーを利用した住宅、美術館、レストランを配置する。

このように多様な地域資源を現地調査から読み解き計画的に統合することは多大な検討を要するが、それを見事に成し遂げた。自然環境を再生せんとする強い意志の賜物であろう。敷地の選定とテーマの設定には現代性と先進性が感じられる。19万坪におよぶ敷地に対して多様な場や施設を配置する構想力や伝統的な材料を用いてモダンな住宅を造りあげる造形力は高い。以上のように総合的な計画・設計力が高く評価された。

ただ、埋立地を湖に戻す過程が「湖に戻す」とのみ表現されるが、真に環境の再生を目指すのであればこの大事業にも目を向ける必要があるだろう。再開発的な計画から脱却し、過去から現在に繋がる歴史を紡ぐことが示されれば作品の説得力が増すだろう。

(西野雄)

### 馬×小学校 ～ホースセラピーによる子どもと引退馬のための新しい居処～

廣田 明日香君 (京都建築大学校)

ホースセラピーを手がかりとした「馬とともに過ごす小学校」の提案である。敷地は馬のまち滋賀県栗東市の、栗東トレーニングセンターに近接する山すそ。稜線に呼応してゆるやかに起伏する線状のスラブ群に小学校諸室を配し、それらを縫うように馬通路を設け、交差部分を児童と馬の触れ合いスペースとした。馬は児童のそばで引退後の日々を過ごし、児童は馬と視線を合わせて餌をやる中でセラピー効果を得る。

年間5,000頭に及ぶという引退馬の処遇と児童のいじめ・不登校という2つの社会問題に挑んだ意欲作だ。短辺方向全体の断面図がなく、児童の学習環境として採光や通風は十分か、馬の生態に適した空間であるか、スラブ下が有効活用されているかなど、建築計画として検

討すべき課題は残る。しかし、いのちの問題を建築によって解決しようとする本提案は、建築のちからに対する素朴な信頼と社会への問題提起という点で、卒業設計としての強い魅力を発している。

(西野佐)

### めぐり・であいの廃線路

石井 大治朗君 (国立明石工業高等専門学校)

初見から注目していたが、詳しく見れば見るほど引き込まれた。岡山県、児島の廃線路跡の遊歩道を舞台に、地域のための場を創出している。ある地域の活性化のためにリサーチを重ねる作品は他にも見られたが、本作品ではそこに残された人々の暮らしや営みまでも丁寧に掬い上げている。具体的には、線路という都市規模の痕跡を背骨に、こども達の活動や街の風景、地場産業など活動の跡を見出し、そこに建築や家具を用いて新たな「生」を差し込んでいる。廃線と共に時が止まってしまった街に対して、劇薬ではない、ゆったりとした再生の処方箋を与えているようだ。審査の過程で、意匠性も含めた移動式建築の是非について否定的な評価も出たが、私は街に新しい時間軸を挿入する試みとして理解した。何より、見ている側にその楽しさを伝えようとする計画とプレゼンテーションに胸のすくような思いがした。このスタンスを無くさずに建築と関わり続けてほしい。

(中西)

### ファーマーズ・ハウス - やすらぎを与える農家住宅-

吉田 くみ君 (大阪市立工芸高等学校)

京野菜の栽培が盛んである京都山城における農家のために考えた住宅である。若い夫婦と2人の子ども(中学生と小学生)の4人家族であり、父親は魚を飼育し、母親はガーデニングが好きで、子どもたちは野球や読書が好きという趣味まで細かい設定がされている。そして、農家にとっての仕事場の畑は、住宅の中心となるリビングから土間を介してつながられている。室内から畑を眺められるだけではなく、土間があることによって畑から土まみれの靴でも室内に入ることができ、リビングにいる家族と容易にコミュニケーションをとることが可能になる。また、子どもたちが二階にいても、リビングと吹き抜けでつながっているのでやはりコミュニケーションをとりやすいであろう。

具体的な家族構成まで想定し、その家族の仕事や趣味のために特別に計画したという設定と、リビングを中心として畑や家族同士がつながっていくであろうということが容易にイメージできることが評価につながった。二階からも畑とのつながりを持たせるなど、さらに積極的につながっても面白いかもしれない。

(高木)